

第58回公開シンポジウム開催報告

「カルト問題とマインド・コントロール論再考 ―今なお幻想の彼方へ惹かれる若者たち―」

フェリス女学院大学 渡辺 浪二

第58回公開シンポジウムはフェリス女学院大学緑園キャンパスで、2014年11月22日（土）、初の試みである日本脱カルト協会との共催という形で開催されました。参加者は180人ほどと、おそらくこれまでにない多数の参加者を得ることができ、これも日本脱カルト協会との共催の相乗効果によるものではないかと思われます。このことを表すものとして、参加者は日本社会心理学会員にのみならず、大学の近隣の市民の方、そして日本脱カルト協会の方と多様でした。もちろん、問題あるカルト団体の方々、宗教団体の信者の方々も多数参加されておりましたが、マスコミからも共同通信社一社ですが取材申し込みがありました。

今回の企画は、カルト問題に対する危機感からです。オウム真理教のサリン事件からほぼ20年近い歳月が経過し、カルト問題は終息し、過去の物語であるかのように語られております。そして、今日大学に入学する学生は、サリン事件以後に誕生した世代になり、オウム事件は忘れ去られようとしています。しかし、あろうことか今日においても、オウム真理教の教えを継承する宗教団体をはじめとして、問題ある宗教団体に入信する若者は絶えません。メディアによってオウム真理教の事件に関わった関係者の裁判が現実に行進しながら、この現実です。

このような現代において、カルト問題とその解明に寄与してきたマインド・コントロール論を、改めて考えてみることは意味があるものと考えました。カルト集団も変容してきていますが、一方のマインド・コントロール論も当初の概念からさらなる発展を遂げてきました。今回のシンポジウムが、二つの団体の共催という形式を取ったのは、学術的、理論的な枠組みにとらわれることなく、すぐれて社会的現象である問題への関心を高め、その対策まで積極的に迫ることにありました。もちろん、学術的なマインド・コントロール論をさらに精緻化させることも狙いがありました。

このような企画ですので、理論と実践を兼ね備えた研究者がシンポジストには最適と思われました。そこで、話題提供者には、カルトにかかわる社会問題に詳しい弁護士で、かつ社会心理学会員でもある紀藤正樹氏（リンク総合法律事務所）、マインド・コントロール理論の第一人者であり日本脱カルト協会の理事長でもある西田昭昭氏（立正大学）、大阪大学でカルトの予防教育の実践を行ってきた太刀掛俊之氏（現・岡山大学）の三氏にお願いしました。指定討論は、マインド・コントロール論の構築に当初から関わってきた安藤清志氏（東洋大学）にお引き受けいただきました。

当日は村田光二会長（一橋大学）からご挨拶をいただき、司会者より企画説明、シンポジスト紹介の後、最初に紀藤正樹氏から『マインド・コントロール』と『カルト』問題―免疫力のある社会に向けて―というテーマでお話しいただきました。紀藤氏はご自身が係争中のホームオブハートに関する事例から始まり、近年そこから脱会したミュージシャンの書籍に触れ、そこで行われたマインド・コントロールの技法や脱会の経緯などについても報告されました。さらに、統一教会の勧誘手法等について、マインド・コントロールなど存在しないというカルト団体側の批判については、多くの裁判においてマインド・コントロールの存在が認められ、その違法性は明らかであるとの見解が示されました。

引き続き、西田昭昭氏からは、「一般にも社会心理学者にも知って欲しいカルトとマインド・コントロールの知識」というテーマで、当初のマインド・コントロールの定義に目的の悪意性を加えるとともに、最近では「心理操作：psychological manipulation」という概念でとらえ方がより適切である、との見解が述べられました。その後、マインド・コントロールはないという一部の見解に対して、心理学的立場から紀藤氏と同様反論を唱え、「勧誘―教化―維持」という3つのプロセスに渡って明確にマインド・コントロールの手法が用いられていることを明らかにしました。最後に、マインド・コントロールの技法が人々の人権を侵害するばかりでなく、テロリズムのような危険な行動を生

み出す源泉になるとの警鐘が發されました。

次いで、太刀掛俊之氏からは「大学におけるカルト問題と予防教育の実践」というテーマで、大阪大学で行われている、極めて実践的なカルトへの予防教育の報告がありました。大阪大学では全学生必修授業『大学生生活環境論』を設け、カルトやマインド・コントロールの座学的な講義にとどまらず、勧誘に対する抵抗力を高めるロール・プレイまで行っているとの事でした。また、被勧誘体験で被害を受けた経験のある学生は、人文系よりも理工学系に多いという興味深い数字もあげられ、最後に、大学におけるカルト問題へのスタンスは注意喚起をすればよいというものではなく、予防教育に努めるという社会的責務を認識しなければならぬとの見解を述べられました。ここで、休憩に入り、会場からの質問を書きいただき、回収しました。

休憩後に、指定討論者の安藤清志氏からカルト問題の理解にとって大きな影響をもたらした「影響力の武器」の発刊前後の経緯が紹介され、学会におけるマインド・コントロールに関するイベントは、1996年日本心理学会第60回大会から今回の公開シンポジウムまで、ワークショップ等を含めると7回開会されているとのことでした。この間、一見カルト問題とマインド・コントロール論への関心は薄れてきたようにもみえるが、カルト問題への対策は広がりを見せている一方、カルト側の働きかけは対象が大学生から高校生へと広がり、コミュニケーション手段の変化に伴い、勧誘の手法もそれに応じた拡大をみせていると分析されました。そして、マインド・コントロール理論を用いることによって、勧誘における心理操作の存在（入り口）とそのことへの気づき（出口）をもたらすことの有効性を強調されましたが、一方でカルトからの脱会者の方々への偏見を助長する危険性があることも指摘されました。最後に、幻想の彼方へ惹かれる若者を増やさないための教育・対応の重要性を述べられました。

その後、短い時間ではありますが、会場からいただいた質問にシンポジストの方からお答えを頂きました。

最後に企画・司会者の渡辺が、当初のマインド・コントロール論からすれば格段の精緻化がなされたとの感想が述べられ、まとめとして指定討論の安藤清志氏の指摘にあった2つの要素「カルト問題の知識を高めること」、そして「勧誘への抵抗のスキルを磨くこと」が重要であるという言葉をそのまま頂き、これこそがカルト問題への予防と防衛策であることを強調し、無事シンポジウムを終えることができました。

今回のシンポジウムを開催するにあたり、学会企画担当の相川充先生、広報担当の三浦麻子先生には大変お世話になりました。また、共催ということで、日本脱カルト協会の山口事務局長、滝本太郎前事務局長、そしてシンポジウム当日には脱カルト協会の多くの会員の方々にも会場運営の面でお世話になりました。ここに記して感謝いたします。